

アーカイブズ

ARCHIVES

沖縄県公文書館だより 第5号

1997年6月30日発行



天孫廟にて鶴亀兄弟、阿君を討つの図（部分）岸秋正文庫

特集：「岸秋正文庫」特別展

～特集～「岸秋正文庫」特別展

沖縄関係文献の収集家として高名だった故岸秋正氏の蔵書が、今年1月、夫人の朝子氏より沖縄県公文書館に寄贈されました。この蔵書群を県民のみなさんにご紹介するため、平成9年8月1日から9月28日まで、二期に分けて特別展を開催します。前期は新発見の「渡地村文書」を含む古典籍、後期は明治以降の雑誌類を中心に展示します。

今回はこの特別展にちなみ、展示の概要、スケジュール、岸秋正文庫中の資料、そして故岸秋正氏の人となりなどを紹介する記事を集めました。

ある。冊封使録は、徐保光「中山伝信録」康熙唐本・和重刻本（桑江訛注本もあり）・周煌「中山国志略」天保官刻本等があり、漢詩文集には程順則「雪堂燕游記」京都刊本・「蓬水奇賞」・「東遊艸」・「夢樓詩集」乾隆唐本等があり、特に唐本の「中山伝信録」・「夢樓詩集」は貴重である。

術的にも高レベルで、知識階層向けに出版された木版本及び写本、(二)庶民階層向けの琉球もの木版本、(三)琉球関係古記録・古文書、(四)その他一点もの、に大きく分類できる。

(一) 高レベルの木版本・写本

袋中『琉球神道記』慶安木版本(直筆影印本・昭和以降の各種活字本もあり)、写本で広く流布した新井白石の『南島志』、各時期の冊封使録、琉球人・冊封使従客の漢詩文集等が

岸秋正文庫には、およそ一万一千点の資料が収蔵されている、と聞く。全蔵書の整理には、今後数年を要すると思われるが、蔵書の一部と作成中の仮目録を概観して、近世期の資料を中心に紹介したい。

琉球学研究の宝庫

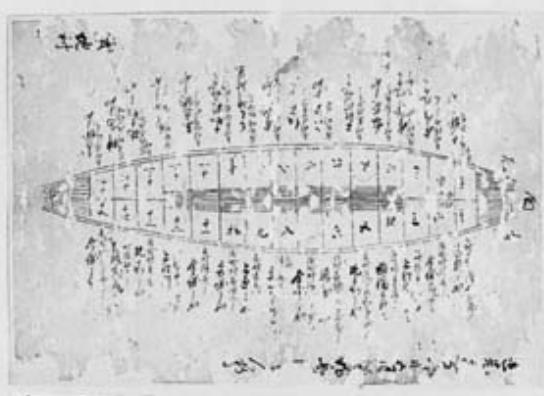
一岸秋正文庫概観一

富島壯英（沖縄県文化振興会史料編集室室長）

(三) 琉球もの木版本

(三) 琉球もの本版本
一方、主として庶民階層向けに出版された資料群としては、琉球使節の江戸上り関係の版本、講談物として庶民に親しまれた為朝琉球渡来伝説・弓張月関係の版本、他に寺子屋等で教科書として利用された各種の「六論衍義」等が群を抜いて多い。

蔵書は、その所蔵者を語ると言う。岸秋正文庫の蔵書を概観すると、岸氏の琉球・沖縄への熱い眼差しを感じる。琉球・沖縄学研究の宝庫がまた新しく増えたことを喜び、夫人の朝子女史をはじめ関係者各位に心から感謝したい。



古-95

▲道光三十年庚戌五月爬龍舟乘舟人數賦 渡地村（仮題）

が東恩納文庫にも所蔵されている。

向朝保の七言絶句や馬兼才の書、
絵入りの『琉球產物志』・『甘諾百

岸秋正氏の横顔と資料の収集

金城 功（沖縄大学教授）

岸さんが沖縄に関する古書類の収集を始めたのは昭和二十（一九五五）年の頃からである。岸さんは四十年間沖縄関係の古書類を求めて、古書店・古書市に足を運んだことになる。

岸さんが四十年間かけて集めた資料が沖縄県公文書館に寄贈されたのは、今年の一月のことであった。その折に岸さんのことについて書く機会があつたので、一日も早い公開が故人の供養になると記した。公文書館の職員の努力で岸さんの蔵書が公開展示されることになる、という。非常に喜ばしいことであり、公文書館の職員に敬意を表する次第である。

岸さんはいつも笑をたたえた丸顔の人であり、律儀な人であった。奥様の朝子さんは「夫は几帳面な性格のうえに、士官学校で軍人としての教育を受け、なにごとも正確に行なう人だった」と書いておられる。几帳面な性格とものごとを正確に行なう生き方が、岸さんの蔵書の白眉である雑誌の収集を成し遂げさせたものと思っている。

古書市で積み上げられた雑誌の中から沖縄に関する論文・記事等を探

し出していくことは大変に根気のいることである。それをなさしめたのは、沖縄への関心と几帳面で正確を旨とする岸さんの生き方に負うていると思う。

古書類の収集だけでなくご自分で集めた古書類については書誌学の面からも目を向けておられた。岸さんの友人であつた天野鉄夫さんが雑誌類の散逸を恐れ合冊して保存していくことについて、元の形が分からなくなると後々困ることになるのだがと、かつて岸さんは話しておられた。書誌学研究の面から気になつておられたようである。求めた雑誌類は傷まないようとに、バラフィン紙でカバーし、大事に大事に保存しておられた。

古書市に出かける楽しみの一つは沖縄関係図書の収集家崎浜秀明さんにお会いすることでもあつた、という。古書市では大抵顔をあわせ、崎浜さんは図書、岸さんは雑誌を探したという。帰りには喫茶店でコーヒーを飲みながら古書類についての情報交換することで疲れも忘れたといふ。

晩年体調を崩された岸さんは、古本屋とのおつき合いが必要なことでしょうな、ときいたことがあった。岸さんは欲しい資料を確実に入手するには一か所の古本屋と親しく取り引きすべきだ、と古書収集の哲学を話しておられた。親しくしていると、古本屋が客の熱意を感じとり集めてくれるので欲しい本は大抵手に入る



▲琉球人行列絵巻



▲岸秋正氏の資料収集日誌

秘められた使命感

高良倉吉（琉球大学法文学部教授）

岸秋正さんがいかなる動機や目的で沖縄関係文献の収集に没頭するようになったのか、正確な事情を私は知らない。遺稿集「我が青春の思い出」（一九九六年十二月）や朝子夫人の「だから人生って面白い」（一九九六年二月、大和書房）をひもとくと、そこには既に仕事や家庭の他に諸書を涉獵することに無上の悦びを感じた岸さんの姿があるのみである。

帝國軍人として幾多の死線をさまよい、多くの仲間を失った岸さん。縁あってウチナーモーク（沖縄婿）となり、宮城仁四郎さんを始め多くのウチナーンチューと友達になつた岸さん。その岸さんが書物、ながんずく沖縄関係文献の収集に静かな情熱を傾けたのはなぜなのか、そのような関心を私は抱き続けてきた。

しかし、岸さんに何度もお目にかかる機会を得ながら、私にはその疑問を質す勇気がなかつた。会うたびごとに岸さんは必ず最新情報を持参していく、その場は本の話で持ちきりだったからである。新情報を語る岸さんは何時も楽しそうであり、柔和な顔を一層くずして本の話に興じての掛けがえのなさ、また、その資

た。「ところで岸さん、そもそも貴方は」、といった質問が全く似合わない場面なのであつた。

岸さんが集めた膨大なコレクションのすべてを私は見たわけではない。その一部を閲覧し、また、親しく交流した成果に立つて言うならば、岸さんはいくつかのテーマがあつたと思う。まず一つは、沖縄の歴史や文化に関するトータルな知識に立脚して諸書を収集し、集めた成果については必ず目を通したうえで、次から収集に活かす態度を堅持したことである。このことは岸さんを我々が舌を巻くほどの「物知り」に押し上げ、氏の収集活動に体系性を与えることになつた。

二つに、沖縄のために役立つなら、苦労して集めた資料とはいえ惜しみなく提供する姿勢を堅持したことである。

ある。そのような態度の岸さんの恩恵に浴した人、機関は数多いと思う。提供したにもかかわらず、礼状や成果物を寄越してこない者に対して岸さんはしばしば苦情を言った。礼儀を知らない、という一般論からではない。かろうじて残つた資料そのものの掛けがえのなさ、また、その資

料を集める苦労に対する思いやりや緊張感の欠如を憂えたからである。

今一つは、沖縄モノを集めるうえで東京は拠点となる場所だ、との認識を持っていたことである。当の沖

縄は戦火によつて人命はおろか諸書まで灰塵に帰しており、文献資料のいくつかの分野についてはエアーボケットのような状況を呈している。

その空白部分を中心に東京でストックされているものの中から沖縄関係を拾い上げるのが自分の仕事だ、と決意していたと思う。その空白部分を岸さんが何と考えたか、答えは岸コレクションにあるはずである。

前述の理解が大過ないとすれば、岸さんは単なるコレクターだったのではない。書物やそこに記された人々の知的営みを愛した方であることはもちろんだが、それ以上に、沖縄を愛した方だった。沖縄関係文献資料収集という地味にして道楽のような活動印象を放ちながら、心の底で、空白となつた沖縄の足跡を埋めることを自らの使命とした人だったのです。

特別展について

「ところで岸さん、そもそも貴方は」と本人を前に切り出せなかつたのは、静かな使命感を秘めて書物や沖縄の話題に興じる岸さんの深さに圧倒されたせいでもある。

そのような方の結晶が沖縄県公文

岸秋正氏と岸秋正文庫

「沖縄へのまなざし—岸秋正文庫の世界— 岸秋正文庫特別展について

岸秋正氏（一九一七—一九九五）は、大東糖業（のちの大進貿易株式会社）代表取締役東京連絡事務所長を務めるかたわら沖縄関係の文献を精力的に収集した人物です。昭和三十七年頃から収集され始めた彼の蔵書は、その範囲の広さ、質の高さで、しだいに研究者の間に知られるようになっていきました。

岸秋正氏は一昨年（一九九四年十二月）に亡くなりましたが、一万冊以上におよぶ彼の蔵書は、今年の一月に夫人の岸朝子氏から当館に寄贈されました。このコレクションを「岸秋正文庫」と名付け、整理をすすめています。今回、「岸秋正文庫」の概要を県民の皆さんに紹介するため、平成九年八月一日から約二ヶ月間にわたつて「岸秋正文庫特別展」を行ふ予定です。

沖縄考古学研究の貴重文献揃う

安里嗣淳（沖縄県文化振興会史料編集室主幹）

沖縄の考古学は明治二十年代に、調査旅行で得た遺物の情報を記録、紹介することから始められました。

初めて考古学的な調査をおこなつたのは、東京大学人類学教室の鳥居龍藏でした。鳥居は一九〇四年に当時東大生だった伊波普猷の協力を得て沖縄に渡り、沖縄本島から宮古・石垣・与那国島まで踏破しました。その成果として翌年発表されたのが「沖縄諸島に住居せし先住人民に就て」と題する論考です。

当時としては沖縄の考古学的調査は珍しかったのでこの論考は「太陽」、「東京人類学会雑誌」、「考古界」に掲載されました。鳥居はこのなかで琉球人はアイヌ系だとする民族の系譜にまで論及しています。

また、「八重山の石器時代の住民について」と題する論考も「太陽」に発表し、八重山諸島の文化が南方につながることを指摘しています。ところが大正時代になつて、この論考が「有史以前の日本」に再録され、當時の「同化」の風潮を反映して、八重山の外耳土器は日本の弥生式土器の系統であるという強引な主張に変わっています。

一九一九年には東大の松村瞭が中城村の荻堂貝塚を発掘し、「琉球荻堂貝塚」と題する報告書を刊行しました。九州の縄文文化との関連を論証する緻密な内容をもつ同書は、今でも沖縄考古学の古典のひとつになっています。また一九二〇年に大山柏が美里村（当時）の伊波貝塚を発掘し、同様に詳細な「琉球伊波貝塚発掘報告」を刊行しました。これにより、琉球の縄文文化がより具体的に把握されるようになりました。

昭和期にはいると京都大学の三宅宗悦が「南島の石器叢成」を発表し、より緻密な先史研究が進められました。戦後は、一九五〇年に八幡一郎が「民族学研究」中の「琉球先史学に関する覚書」で、戦前までの成果を総括しました。戦後の調査は八重山から始まり、金闇丈夫・国分直一らの「琉球波照間島下田原貝塚発掘報告」や、早稲田大学の「沖縄八重山」が基礎的文献となっています。

このほかにも考古学に関する文献が多くあり、岸秋正文庫の書籍をめくると、明治の誕生期から現代の盛期までの、沖縄考古学研究の進展のようすがよくわかります。



▲琉球伊波貝塚発掘報告



▲人類学研究報告（荻堂貝塚）



▲有史以前の日本



▲考古界

父、伊波普猷の論文を含む近代以降の雑誌類は、「琉球・沖縄学の系譜」を示しているといえます。

今回は、これらの古典籍と雑誌類を中心、「沖縄近代文学関係資料」、「戦前の行政資料」、そして新発見の「渡地村文書」等を展示します。

「岸秋正文庫」は、さまざまな時代の、さまざまな人びとの沖縄に対する関心から生まれたものといえます。そして、その背後に、それらをひとつつのコレクションとして結実させた、岸氏の「沖縄へのまなざし」があつたことを見落とすわけにはいきません。「岸秋正文庫」は、沖縄に対する幅広い興味やテーマに応えてくれるコレクションです。今回展示する蔵書の中からも、きっと興味ひかれる資料に出会えるのではないかでしょうか。

展示スケジュール

今回の特別展では、展示期間を前後二期に分け、資料を入れ替えます。
前期（八月一日～八月二十四日）は、明治時代以前の古典籍資料を中心とした展示を行います。後期（八月三十日～九月二十八日）は、明治時代以降の資料をご紹介します。前期と後期の間に、資料入れ替えのための休館日（八月二十六日～八月二十九日）を設けますのでご了承下さい。

まーらん船

マディソン・ロー・ライブラリー

ワシントンDCの官庁街には、旧国立公文書館をはじめ古代ギリシャ風の建築物が多い。そのようなアメリカ式ギリシャ建築はかつてヨーロッパからの訪問者を苦笑させたといわれるが、いまではすっかり風景になじみ、さほど奇異な感じを与えない。

そんななかで、これぞギリシャ建築の伝統をくむ現代アメリカ建築だといわんばかりに偉容を誇つているのがマディソン・ロー・ライブラリー。第四代大統領ジェームス・マディソンの業績をたたえて一九七一年に建てられたこの図書館は法律関係出版物、雑誌・新聞その他定期刊行物を収蔵している。

建物の前面には二十メートルはあるかと思われる巨大な大理石の角柱が二十四本並んでいる。かすかに黄味をおびた石の柔らかい色、いかにも清潔な感じを与える直線の美しさ。陽があると柱の影がいい。これ見よがしの派手さはないが、それでいて自信にみちて静かに立っているという感じである。専門家はどう見るか分からぬが、好み



きな建物だ。そのライブラリーの一角に熱帯植物を植えた中庭がある。聞こえるのは小さな滝を模した噴水の音だけ。庭の中央には一抱えほどもあるイトスギの化石（珪化木）が陳列されている。一九七一年、図書館の建設中に四十フィートの地下から出土したもの。黄色と茶色の斑点のあるその化石には虫のうがつた穴や折れた枝のあとが残っている。

約七千万年前、まだワシントンDCがボトマック河の川底にあつたころ、川上から流れて来て中洲に埋もれたものだという。七千万年前のボトマック河畔に亭々とそびえ立っていたイートスキの巨木に穴をあけた虫はどんな虫だったのだろう。太古の風景を想像していると、たかが四十、五十年前の戦後資料を血眼になって探している自分の姿が、いかにもおかしかった。

館長 宮城悦二郎

公文書館ってどんなところ？③

～映像・音声資料収集・整理担当編～

公文書館では、沖縄関係映像・音声資料を収集し、保存と活用を図ることも重要な業務のひとつです。開館以来、多くの関係者の協力を得て、戦前、戦後に撮影され当時の沖縄が記録された映像資料の寄贈がありました。その主なものに戦前東京で撮影された富名腰義珍の空手演舞が収録された9ミリフィルム、戦後の米国留学生の記録映画「明日を導く人々」16ミリフィルム、石川市宮森小学校ジェット機墜落事故8ミリフィルム等があります。

また、復帰前に本土の各放送局が収録した沖縄関係の映像・音声資料の収集にも力を入れており、すでに福岡県のRKB毎日放送株式会社からは、戦後に収録したニュースやドキュメンタリーの映像資料が届いています。

こうして収集した映像資料を適切な環境条件のもとで永久保存し、広く県民に活用してもらうため、閲覧用にはビデオテープを作成しています。これらの作業を行うフィルム整理室は16ミリ自動フィルム検査機、16ミリフィルム用ビデオ変換機（TVコンバーター）、ペーターカム（業務用TVデッキ）、ビデオプリンター、レコードプレーヤー、テープデッキ等の専用の機器を設置しています。

資料の受け入れから保存までの作業の流れは、資料の所在が確認されたら寄贈、寄託の依頼手続きをおこない、映像が公文書館に届くと最初にカビや害虫対策のため燻蒸します。燻蒸後にフィルム整理室に運び、内容を確認してデータシートの作成、登録、閲覧用テープを作成します。その後、原本は永久保存をして、閲覧用テープは利用者の閲覧に対応できるようにしています。資料の活用は、日頃は閲覧室で利用者が申請してミニシアターやブースで個々に行われますが、今年5月より月1回（第4金曜日）上映会を企画して講堂映写室に設備された16ミリ・35ミリ映写機、ビデオプロジェクターを使用して県民に公開しています。（公文書主任専門員 仲地 洋）

声

平成八年度
公文書館講演・講座

毎回多数の方々のご参加をいただきました。その声を一部ご紹介します。

※()内は講座・講師名。講師敬称略。

連続歴史講座（全十回）

「沖縄の歴史」～先史から近代へ～

平成八年十二月五日～平成九年二月二十七日 每木曜午後六時三十分～八時

◇石器を実際に手にとつて見ることができて良かった（第一回「沖縄の先史時代」安里嗣淳）

◇本や資料からだけでは得られない、

生きた琉球の歴史がわかった（第二回「近世琉球の歴史と民衆」仲地哲夫）

◇日本の「もう一つの歴史」を、民衆レベルで実感できた（第三回「幕末の琉球をめぐる国際環境」仲地哲夫）

◇大交易の中心は、実は中国だったということがすごくショックだった（第四回「大交易の時代」田名真之）

◇冠船貿易を、王府・中国・庶民・商人それぞれの側からとりあげ、明確な近世史像をうつたてることができた（第五回「琉球の冠船貿易について」豊見山和行）

◇漢詩に込められた感情に感動した（第六回「近世琉球の漢学」上里賢一）

◇当時の琉球の東西交流について、庶民の立場も含めてよくわかった（第七回「一九世紀前半における琉球の西洋文化との遭遇」照屋善彦）



▲連続歴史講座（第2回）

◇ステレオタイプではない謝花昇、近代人としてのなげきを見た（第八回「謝花昇と土地整理事業」田里修）

◇太田の「同化論」がこれほど奥深いものだったとは知りませんでした（第九回「太田朝敷論」比屋根照夫）

◇月城の「女性解放論」は初めて聞くことで、伊波普猷の女性論の先を示すものとして、関心が深まりました（第十回「伊波普猷と月城」比屋根照夫）

特別講演会「沖縄と私」

平成九年一月十七日（金）午後六時三分～七時三十分

講師 岸 朝子

◇沖縄を誇りに思っていることに感動しました。沖縄のために貴重な蔵書を寄贈して下さって、感謝します。

◇これまでの沖縄観から脱して勇気と展望をもつてという話、とても刺激になりました。女性の生き方にもよい影響を与えて下さったと思います。

◇岸朝子さんの講演会は、岸秋正文庫の寄贈を記念して行われました。

※講演・講座のビデオは閲覧室でご覧になれます。係員にご相談ください。

平成8年度利用状況

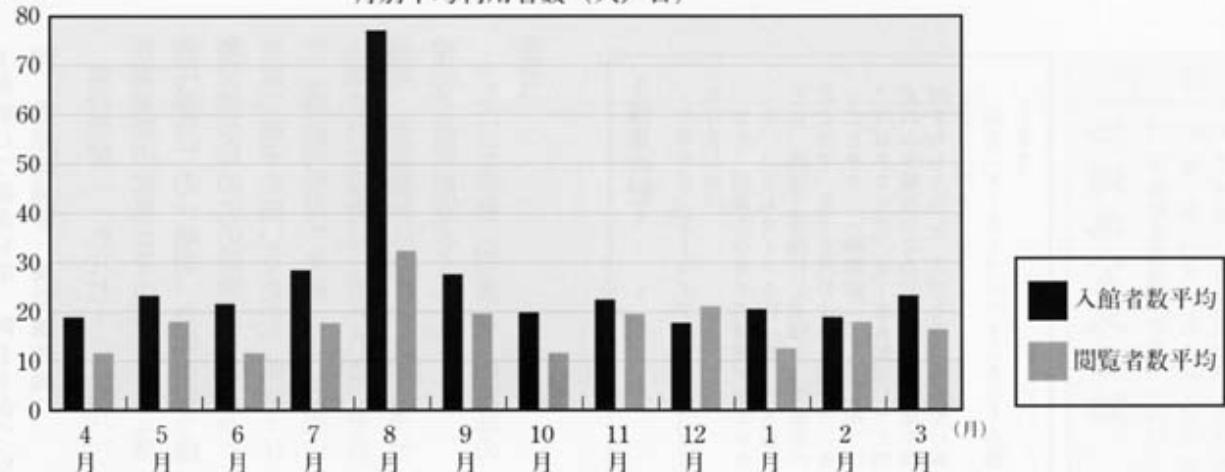
月別利用者数（人）

平成8年4月～平成9年3月

区分	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開館日数	24	22	24	24	26	21	25	23	22	20	22	21	274
入館者数	440	532	547	679	2,017	581	488	541	388	408	413	472	7,506
閲覧者数	279	388	285	414	841	408	320	454	481	248	404	338	4,860

(人数)

月別平均利用者数（人／日）



上映会のお知らせ

「映像資料で見る復帰前の沖縄」

沖縄県公文書館では、復帰二十五周年を記念して、復帰前に制作された沖縄関係映像資料の上映会を行っています。入場料は無料です。

時間 午後六時～七時三十分

七月二十五日（金）

「沖縄列島」、「沖縄の風物」

八月二十二日（金）

「切手のふるさとⅠ・沖縄切手たどりがき」、「孤の果ての島、八重山群島」、「富名腰義珍の空手演舞」

九月二十六日（金）

「切手のふるさとⅡ・沖縄風土記」、「奄美大島」、「ハワイに生きる二部」

第二回保存箱教室のお知らせ

前回多数の方々にご参加いただきました「保存箱教室」。今回も、資料を守るために箱つくり教室を開催します。参加費は無料です。

場所 管理棟一階 製本補修室

日時 八月十日（日）、十七日（日）

午後二時～四時

九月 三十一日 八月 二十六日、二十七日、二十
八日、二十九日

利用案内

開館時間 午前九時～午後五時

休館日 月曜日、祝祭日

・初めて利用される方は、「利用証」の交付を受けて下さい。書庫内の資料を閲覧する時には、「利用証」が必要です（交付の際に、身分証明書が必要になります）。

・参考資料室の資料は自由に閲覧できます。
・利用者用端末で検索し、閲覧を希望する資料が書庫内にある場合は、「利用証」の番号を入力して「閲覧申請書」を作成し、受付カウンターに出して下さい。

・資料の複写を希望される方は受付にお申し出下さい（実費）。

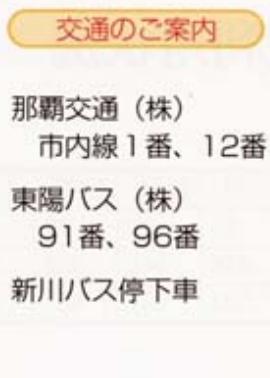
・疑問な点がありましたら、お気軽に係員にご相談下さい。

特別休館日のお知らせ

岸秋正文庫特別展の展示資料入れ替え、及び館内燐蒸のため特別休館日を設けますのでご了承下さい。

七月 十九日、二十九日、三十日、

三十一日



表紙の説明

天孫廟にて鶴亀兄弟、阿君を討つ
図（豊原國周筆、梅堂國政画）

滝沢馬琴（一七六七～一八四八）

が源為朝の武勇伝を小説化した「椿弓張月」の一場面。為朝を慕つ鶴亀兄弟が母の仇の阿君（くまきみ）を討つ様子を描いたもの。明治十年に「椿弓張月」を興行化した際に出版された役者絵と思われる。豊原國周、梅堂國政は共に明治期の浮世絵師で役者絵をよくした。

表紙は三枚継（写真上）の左端の部分。

「編集後記」

今号から「アーカイブズ」のロゴが変わりました。館長エッセイの連載が始まりました。コラムタイトルの「まーらん船」とは、琉球王国時代に活躍した交易船のことです。海上を馬のように軽やかに走ることから、「馬鹿船（まーらん船）」と呼ばれました。まーらん船は、ただ物資のみを輸送したのではなく、知識や情報もたらし、人びとをつなぐ掛け橋となつたのでした。

新生「アーカイブズ」をよろしくお願ひします。

発行 沖縄県公文書館
〒901-11 沖縄県南風原町字新川一四八一三
電話（098）八八八一三八七五
FAX（098）八八八一三八七九